

小学生時代の食卓経験が 青年期の摂食障害傾向に及ぼす影響

平 岡 薫

【目的】本研究の第一の目的は、現代の家庭における食卓場面の特徴、食卓場面における母子相互交流を詳細に捉えられるような尺度を作成し、小学生時代の家庭における食卓場面での経験を明らかにすることとした。第二の目的は、尺度開発によって明らかとなった食卓経験の諸側面と、青年期における摂食障害傾向、アレキシサイミア傾向との関連を調査することとした。

【方法】近畿圏内の複数の私立大学の学生を対象に質問紙調査を行った。有効回答数は513名（男性273名、女性240名、平均年齢は19.5歳、SD=1.27）であった。食卓経験のありようを反映すると思われる項目を独自に作成した食卓経験尺度と、既存の摂食障害尺度とアレキシサイミアを測定する尺度を使用した。

【結果】小学生時代の食卓における経験を明らかにする食卓経験尺度について、主因子法、Varimax 回転による因子分析を行った結果、最終的に8因子50項目が抽出された。各下位因子は「子どもの欲求優先」「食事を重視する母親」「食事に関するしつけ」「コミュニケーション」「母親の雰囲気察知」「母親への気遣い」「父親の影響」「あたたかい雰囲気」と命名した。

次に、食卓経験尺度の下位尺度の組み合わせパターンから食卓での経験の特徴をより詳細に捉えるために、Ward 法によるクラスタ分析を行った。その結果、クラスタの解釈可能性から4つのクラスタが得られた。食卓経験尺度に表れている母子相互交流という視点から解釈を行い、相互交流希薄群、平均的相互交流群、肯定的相互交流群、相互交流不安定群、と命名した。

食卓経験のタイプ、性別の要因が摂食障害傾向に与える影響を検討するために、2要因の分散分析を行った結果、小学生時代の食卓での経験の違いや性差の要因は、青年期の摂食障害傾向に影響を与えることが明らかとなった。なお、摂食障害傾向を測定する EDI 尺度の下位尺度「肥満恐怖・体型不満」「過食」において、肯定的相互交流群よりも、平均的相互交流群、相互交流不安定群の得点が高かった。

食卓経験のタイプ、性別の要因がアレキシサイミア傾向に与える影響について検討するために、2要因の分散分析を行った結果、小学生時代の食卓での経験の違いや性差の要因は、青年期のアレキシサイミア傾向に影響を与えることが明らかとなった。

【考察】幼少期以降の食事場面での両親の行動と青年期の摂食障害傾向との関連は、田中（2003）によって明らかにされている。本研究においては、食卓場面における母子相互交流を4つのタイプに分類し、食卓場面での親子の関わりと摂食障害傾向との関連をより詳細に明らかにした。